

# 第2回 阿賀野川自然再生検討会

## 既往伐採箇所モニタリング調査結果



阿賀野川河川事務所

平成24年10月

### 目次

- |                                |    |
|--------------------------------|----|
| 1 . 阿賀野川における樹木管理の考え方 . . . . . | 1  |
| 2 . 樹木伐採の実施状況 . . . . .        | 2  |
| 3 . モニタリング結果 . . . . .         | 7  |
| 4 . モニタリング結果の分析 . . . . .      | 11 |
| 5 . まとめと今後の課題 . . . . .        | 14 |

## 環境面における対応方針

砂礫河原への樹木の侵入など、もともとの阿賀野川の河川環境を阻害する要因となっている樹木(主にヤナギ林)は伐採する。

により伐採した箇所での再繁茂を、できるだけ抑制する。

良好な自然環境(エコトーン、湿地環境等)を形成している樹林は、できるだけ保全する。

大径木に成長している樹木は、治水に支障のない範囲で保全する。残存木は大径木の河畔林として成長している在来の落葉高木、野鳥の営巣木等、環境保全上の重要度を踏まえて選定する。

以上の項目と、河川管理上の伐採の必要性を比較衡量のうえ、伐採を行う。

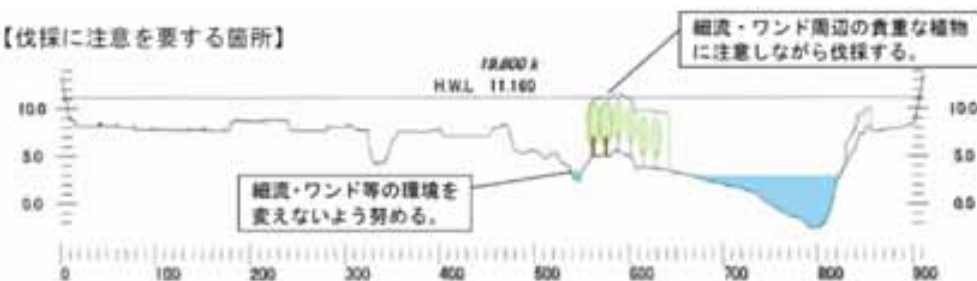
## 重要種に関する対応方針

湿地・ワンド、砂礫河原など、河川の攪乱により維持される環境に育つ(河川独特の環境を基盤とする)植物は、優先的に保全する。(この場合、植物個体を保全するのではなく、湿地・ワンドといった生息環境を保全する。)

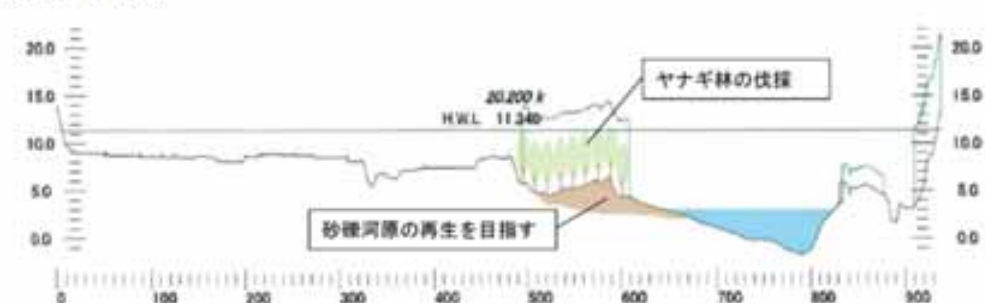
以外の安定した箇所や山野等に見られる植物は、保全の優先順位が相対的に低いものとする。

移動性の動物(猛禽類等)で、河道内を生息地・繁殖地としていないものは、保全の優先順位が相対的に低いものとする。

【伐採に注意を要する箇所】

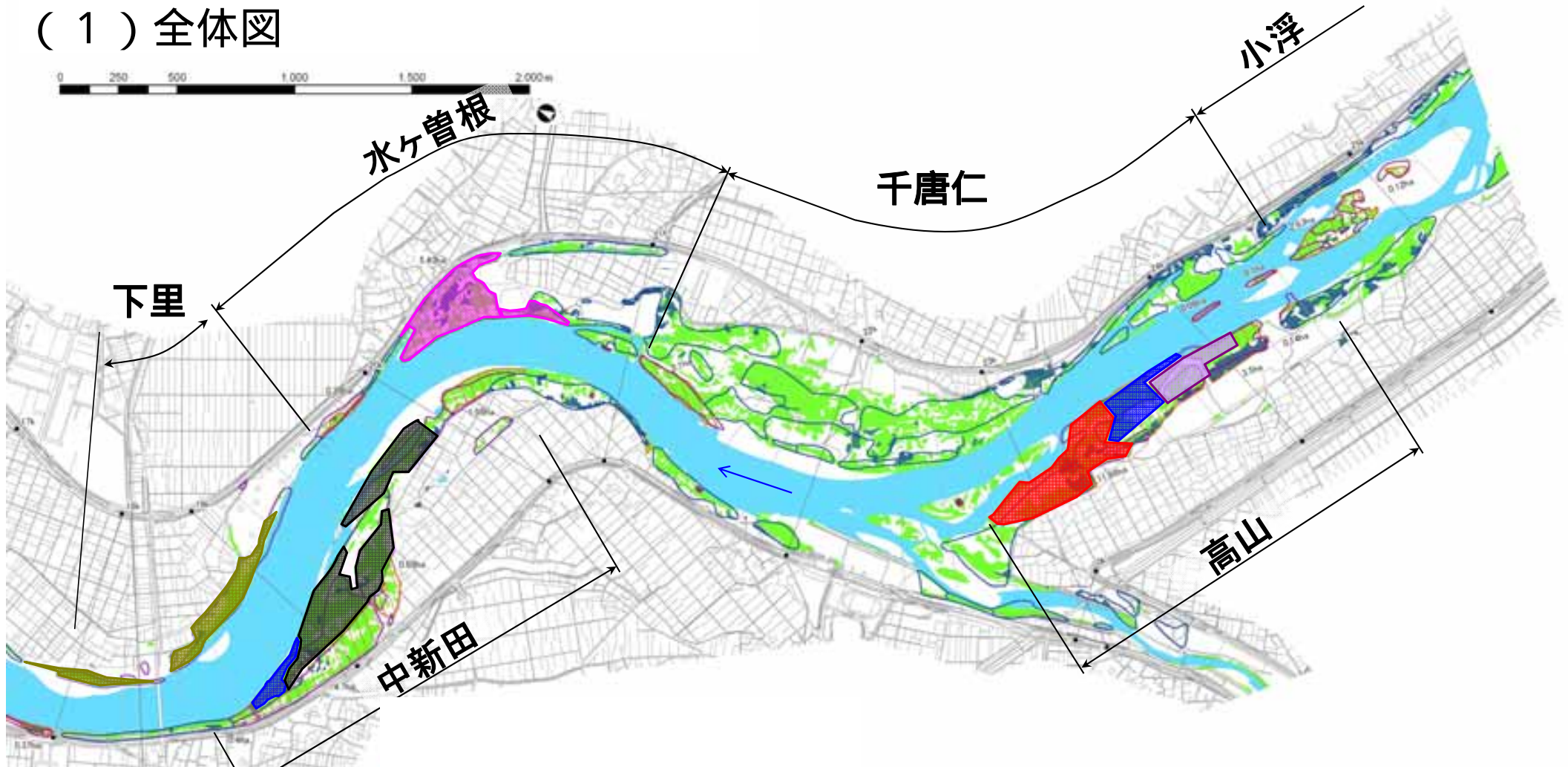


【伐採する箇所】



## 2. 樹木伐採の実施状況 (H20 ~ H24)

### (1) 全体図



#### 樹木伐採状況

H20樹木伐採 (伐根なし)	H23樹木伐採 (伐根あり)
H21樹木伐採 (伐根あり)	H24樹木伐採予定 (伐根あり)
H22樹木伐採 (伐根あり)	
H22樹木伐採 (伐根なし)	

- ・中新田、高山ではH21～24年に樹木伐採前後のモニタリング調査を実施
- ・平成24年度は水ヶ曽根で樹木伐採予定



ワンド等湿地環境を保全

中新田 樹木伐採前  
( H21.10.13撮影 )

新潟市秋葉区  
大安寺

阿賀野川

H21.10.13撮影



凡 例

- H21年度以前
- H22年度
- H27年度以降

ワンド等湿地環境を保全

中新田 樹木伐採後  
( H22.3.15撮影 )

新潟市秋葉区  
大安寺

阿賀野川

# (2) 樹木伐採の状況 (高山地区の樹木伐採前の状況)

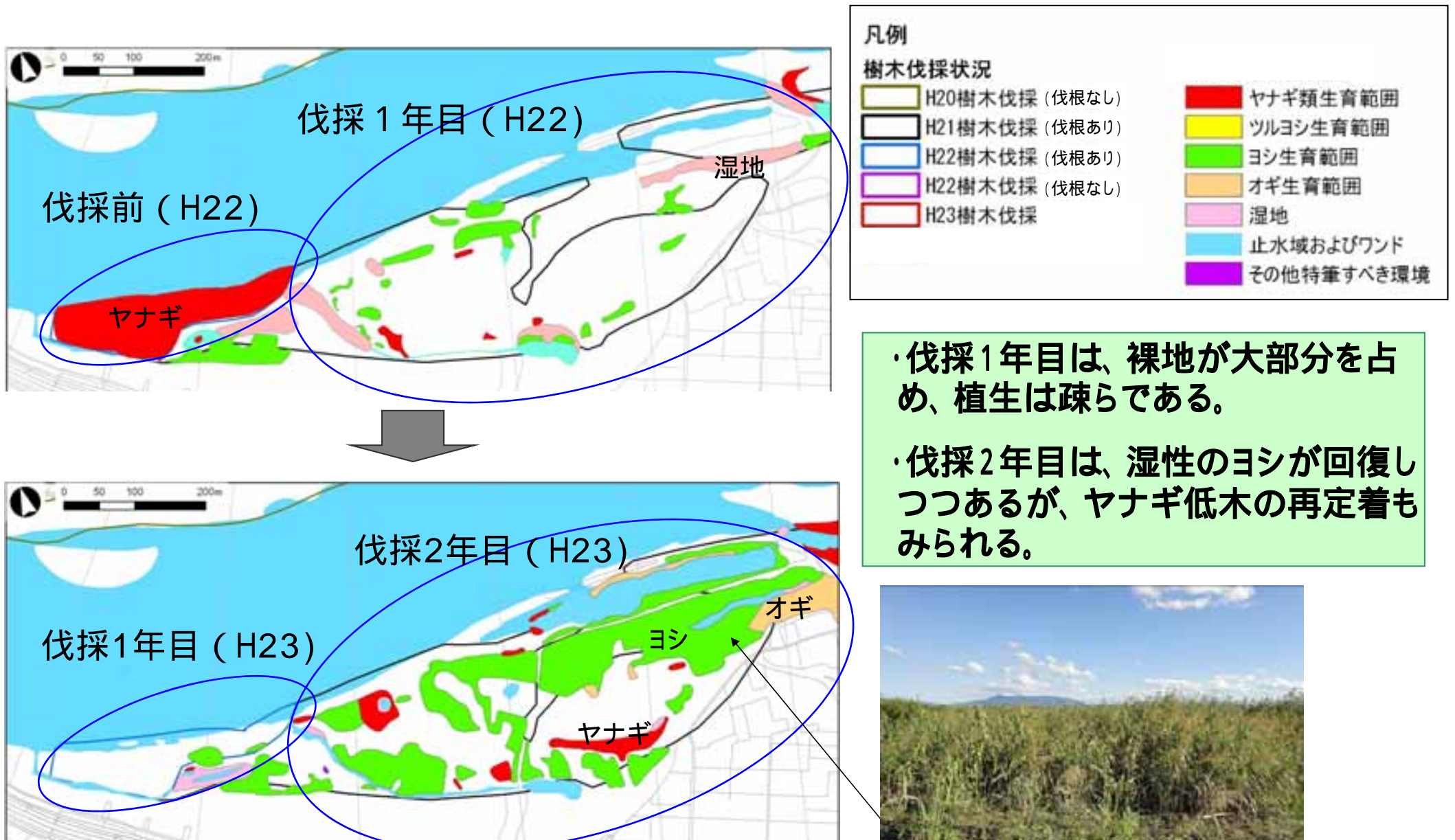




### ( 1 ) 重要種の確認状況の経年変化



## (2) 樹木伐採後のヤナギ・ヨシ等の回復・繁茂状況 中新田



- ・伐採1年目は、裸地が大部分を占め、植生は疎らである。
- ・伐採2年目は、湿性のヨシが回復しつつあるが、ヤナギ低木の再定着もみられる。

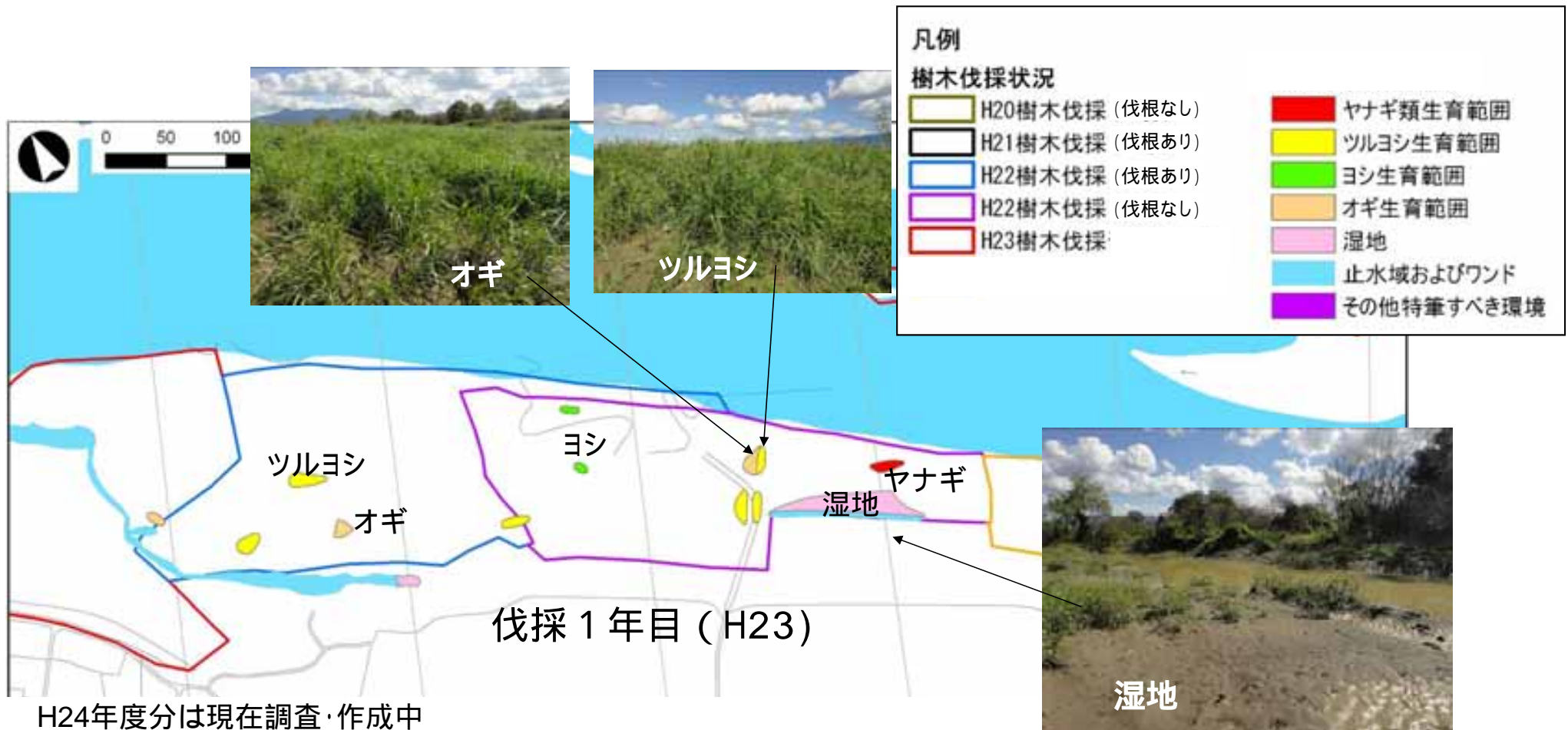


H24年度分は現在調査・作成中

ヨシ

## (2) 樹木伐採後のヤナギ・ヨシ等の回復・繁茂状況 高山

- ・伐採1年目では、裸地が大部分を占め、ツルヨシ、オギ、ヨシ等の湿性草本群落の小パッチが点在している。植生は疎らである。
- ・大規模なヤナギ群落はみられない



## (2) 樹木伐採後のヤナギ・ヨシ等の回復・繁茂状況 H24速報

中新田



ヨシがさらに広範囲に回復傾向である



ヤナギ低木もみられる

高山



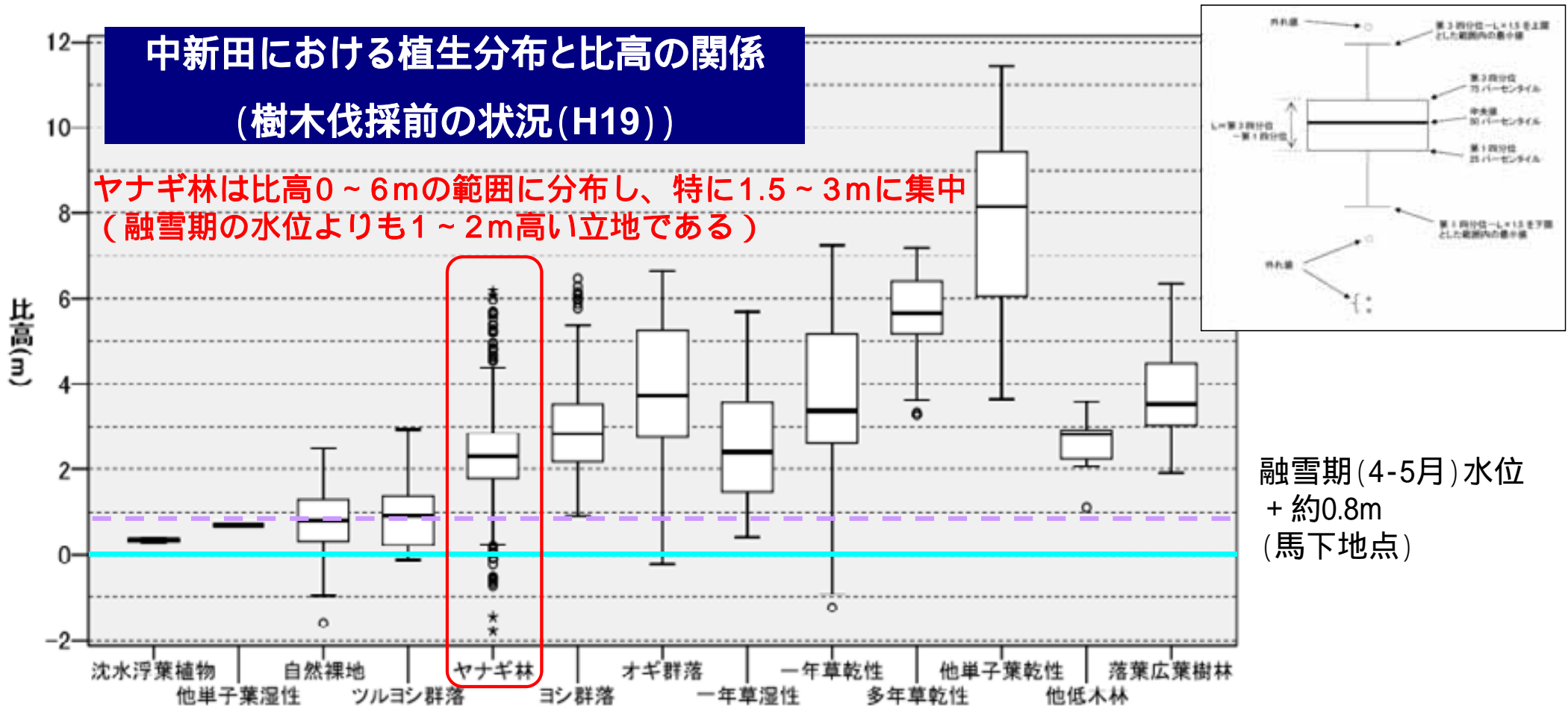
ヨシ等の草本が繁茂している



水辺近くでは裸地もみられる

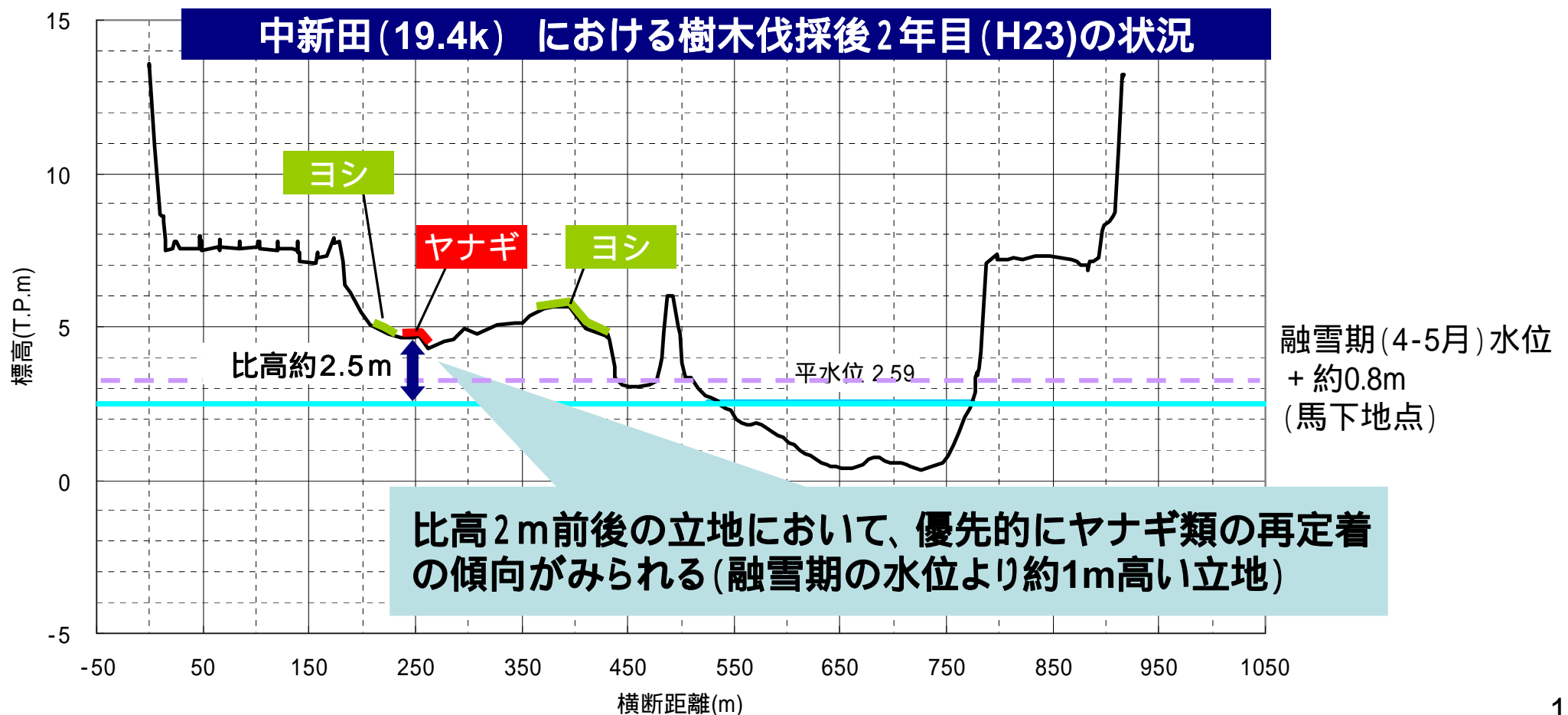
## (1) 阿賀野川における植生分布と比高の関係 (中新田) 樹木伐採前

- ・(中新田の場合、)ヤナギ林は、比高約3m以下、水際線からの約200m内に立地する傾向が高い。特に、比高が約2m~3mの所に集中している。また、ヤナギ林が集中する比高は、融雪期の水位(平水位+約0.8m)よりも約1m~2m高い立地である。
- ・比高が低い場合には、自然裸地やツルヨシ群集が、比高が高い場合にはオギや乾性の草本群落が優占となっている。

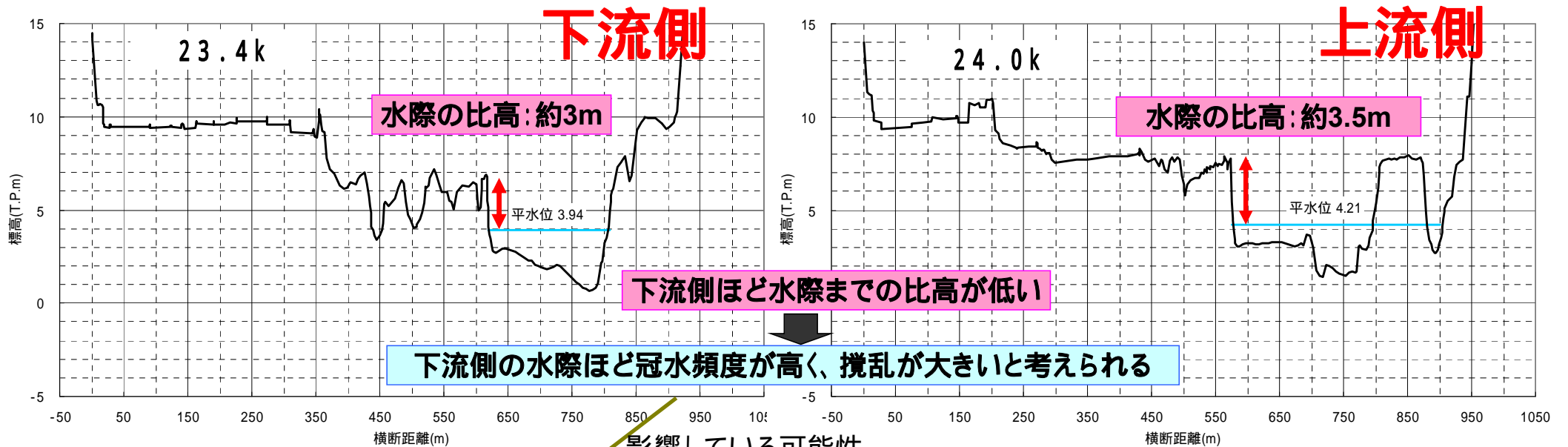


## (2) 樹木伐採後の植生分布と比高の関係 (中新田) 樹木伐採後

- ・元々ヤナギ林が集中する比高2m前後の立地において、優先的にヤナギ類の再定着の傾向がみられる。また、融雪期の水位(平水位 + 約0.8m)よりも約1m高い立地である。
- ・比高の低い場所ほど、伐採によるヤナギ類繁茂の抑制効果が高いと考えられる。
- ←冠水頻度が高く、ヤナギ類の生長・定着に影響している可能性がある。



## (3) 樹木伐採後の植生分布と比高の関係 (高山) 樹木伐採後



・高山では、下流側ほど水際までの比高が低く、上流側に比べて冠水頻度が高く、攪乱が大きいと考えられる。

・下流側の水際では、ヨシ等草本が回復せず、自然裸地が維持されており、攪乱が大きいことが影響している可能性がある。

凡例

樹木伐採状況	
黄緑色	H20樹木伐採 (伐根なし)
黒色	H21樹木伐採 (伐根あり)
青色	H22樹木伐採 (伐根あり)
紫色	H22樹木伐採 (伐根なし)
赤色	H23樹木伐採 (伐根あり)
赤色	ヤナギ類生育範囲
黄色	ツルヨシ生育範囲
緑色	ヨシ生育範囲
茶色	オギ生育範囲
ピンク	湿地
水色	止水域およびワンド
紫	その他特筆すべき環境

### まとめ

#### 重要種・湿性環境の保全

タコノアシ等の重要種や湿性の種が保全されている。また、伐採後の湿性環境にカワヂシャ等の新たな確認種もみられ、良好な環境が維持されていると考えられる。

#### ヤナギ類の再定着

伐採1年目では、ヤナギ類の繁茂はほとんどみられないが、2年目以降、徐々にヤナギ低木が定着している（特に比高2m前後）、ヤナギ林の回復傾向がみられる。 伐根時に残った根や、周辺樹林からの種子供給による可能性

### 今後の課題・方針

#### 外来種の繁茂

伐採後、オオブタクサ等の外来種が比高の高い場所に定着しており、今後もモニタリングを継続し、注視する。

#### 今後の解析方針

比高別にヤナギ類や湿性植生の生長・定着状況を解析する。

